

[研究ノート]

中上健次の庶民信仰

Kenji Nakagami and Popular Religion

城 浩 介

Kosuke JO

Studies in Humanities and Cultures

No. 14

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 14号
2011年2月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
FEBRUARY 2011

【研究ノート】

中上健次の庶民信仰

城 浩 介

要旨 中上健次とえば、その生誕の地、和歌山県新宮市の被差別部落をモデル化した「路地」とそこで繰り広げられる若衆の悲劇を、同じく路地の住民を知り尽くした産婆のオリユウノオバが語る物語として描かれている。しかし、その路地には、ふしぎと被差別部落の陰惨なイメージはない。どんなに悲しい事件でも、究極的には救われる、そんな慈愛にみちた視線が存在している。それはまた、庶民信仰の願望のような視線であると思う。中上健次作品にある「隠国（こもりく）」と呼ばれた熊野の死のイメージから、聖（被慈利）と呼ばれた修験僧、路地にあふれる浄土観をとおして、その庶民信仰を読み解いてみた。

キーワード：庶民の信仰、『高野聖』、浄土教

一 はじめに — 作品中の宗教の位置 —

中上健次の小説作品には宗教、とくに仏教が大なり小なりその構成要素となっている場合がよくある。仏教それ自体がテーマとなっている例はないが、作品の導入部であったり、または登場人物の属性として、神道や仏教あるいは民俗的な信仰にかかわりをもたせてある場合である。作品の導入部では、その次に展開されるストーリーの比喩的な契機となすために、登場人物の属性としてはその役柄が下級の僧の場合に、または情景を構成する背景として仏教説話や宗教民俗の言説がもちいられている。それらは主ではないが従的で、しかもなくてはならない役割を与えられている。そしてそうやって、作品中に仏教（的な）言説や背景が語られたところには、中上健次のもっていた宗教観がおのずとあらわれている場面が少なくないように思われる。

中上健次が推薦する図書である『物語／反物語をめぐる百五十冊』に掲げられた作品のうち、宗教学関係では、源信『往生要集』、高取正男『神道の成立』があるくらいだ。もつとも、この二冊を読みこなすには神道、仏教に加え古典についてのかなり高い素養がなければならぬ。ところが他に、『日本霊異記』『今昔物語』『神道集』があげられていて、説話や語り物文芸、民俗学からする宗教への知識はかなりのものだったと思われる。純粹の仏教、宗教学を修めた形跡こそないが、中上健次の宗教とりわけ仏教、民間の土俗宗教にたいする認識には、小説家独特の直観にうらづけられて高度なものがあつたのでは

ないかと思う。そして、その認識が作品にどんな影を落としているのかを見てみたいと思う。

これは短編集『化粧』（昭和五十三年）にある『浮島』の冒頭である。

それとも、熊野那智の青岸渡寺が、西国三十三カ所の一番札所であるためか、その町が、熊野の真中に位置するためか、子供の頃から行の者、遊行の者をみてきた。その熊野の真中の町、新宮には、四つの神社がある。浜の王子権現、川そばの阿須賀、舟町の速玉、それから小学校裏の山にある神倉。元々、記紀の時代からある古い町だから、それなりのいわれ、伝説は、各々にある。熊野三山のひとつである速玉神社に関して、羽木市の花の窟（あな）のすぐそばに住む一遍上人研究家の清水太郎氏にうかがうと、神社とは、又、死体のあつまるところだったと言う。そう言われれば、阿須賀、速玉は川のそばにあり、よくそこで、川遊びの、水にのまれた子供の死体が、みつかる。速玉、神倉の神章が、鴉を元にしたヤタガラスであることもわかる。また、ひよつとすると、こうも言えるかもしれない。那智の青岸渡寺と大社は鳥葬、海岸にある補陀洛山寺は水葬、王子、阿須賀、速玉は水葬の、死体が集まる場所だった。死体の魂を呼び、鎮めるところだった。その町は、死んだ者の魂と生きている者の魂の行き交うところであった。

作品は、路地の木馬曳き¹の男が、所帯がありながら浮島の森近くにすむ未亡人にのめり込んでいく話である。なにをさしおいても女の元に通いたい男は、押さえきれない欲望にまかせて通いつめ、果ては情事の最中に女郎を思いあまって絞め殺す。浮島は上田秋成『雨月物語』の『蛇性の姪』で主人公の豊男が蛇の化身である真名児と契りを結んだ場所、その廻りには以前は遊廓が立ち並んでいた。そのような街で、男と女の魂の行き交う物語の導入部にこの引用がもちいられている。

中上健次はここで清水太郎氏の説として神社のいわれを紹介し、「死の国」とも呼ばれる熊野地方の死者の葬送について想像する。熊野地方の葬送と深く結びついた八咫鳥、水葬、鳥葬と靈魂の行き交う場所としての社。ところで、仏教民俗学の大家五来重『熊野詣』には、死者の国熊野にまつわる風葬、水葬があますところなく説明されている。そこには、

私はあえて熊野を「死者の国」と呼ぶ。それは宗教的にいえば、死者の靈魂のあつまる他界信仰の霊場だったからである。死者の靈魂がふかくかくれこもるところはすべて「くまの」とよぶにふさわしい。出雲で神々の死を「八十くまでに隠りましぬ」と表現した

¹ 「きんまひき」山林伐採で伐った木を運ぶ仕事。丸太を枕木にしてその上を木が滑っていく。木馬曳きは、伐った木を馬に見立て、それを操る。木の下敷きになる危険がともなう重労働である。

「くまで」、「くまど」または「くまじ」は死者の靈魂の隠るところで、冥土の古語である。これは万葉にしばしば死者の隠るところとしてうたわれる「隠国（こもりく）」とおなじで、熊野は「隠野（こもりの）」であったのだろう。（五来重『熊野詣』）

ここでは中上健次が五来氏の影響を受けたかどうかを探るのが目的ではない。ただ、紀伊半島に点在する被差別部落をレポートした『紀州 木の国根の国物語』では、熊野の土地を「隠国の熊野」と呼んでいる。

紀伊半島、紀州とは、今ひとつの国である気がする。

まさに神武以来の敗れ続けてきた闇に沈んだ国である。熊野・隠国とはこの闇に沈んだ国とも重なってくる。この隠国（こもりく）の町々、土地土地を巡り、たとえば新宮という地名を記し、地霊を呼び起こすように話を書くとは、つまり記紀の方法と似ている。

（中上健次『紀州 木の国根の国物語』序章）

以来、中上健次はその言葉「隠国の熊野」を手放さなかった。熊野にはよそとはちがった空気が漂う、それをつきつめれば、隠された古代の死の在り方が見えてくる。中上健次にとって熊野とは、まず死者の魂が行き交い集う場所であった。五来氏によると、熊野にはその独特の葬送が見えてくる、と。熊野を象徴する八咫鳥も晒された屍に群

れる鳥から連想されたのではないかと。そして「熊野の神秘感はその山と海とにかくされた、古代宗教の残像がかもしだすものである。古代宗教はつねに死の深淵に直面した古代人の、死者信仰と死者儀礼を根底においている。」（五来重『熊野詣』）という五来氏の「隠野の熊野」観は、中上健次の「隠国の熊野」とたしかに共通するところが多い。

二 高野聖

五来重氏の仏教民俗学はつねに庶民の視点を繰り入れ、人々の生活、生と死にかかわる信仰（者）を対象にしていた。人々の暮らしや習俗、祭儀に採取した宗教的事象の断片から、歴史の表舞台に登場することのなかった庶民の信仰と心情を体系的に明らかにしていった。とくに、念仏信仰の定着とそれを普及させた高野聖、遍歴の修験僧に関しては名著が少なくない。そしてここで再び中上健次であるが、やはり遍歴僧を主人公にした短編小説が五篇²ある。この遍歴僧を中上健次は「被慈利」と呼ぶが、その描き方が独特なのだ。熊野山中を行くその被慈利は、あきらかに泉鏡花『高野聖』を意識して書かれたことがわかる。

² 中上健次の短編集『化粧』（千九百七十八年）に『修験』『磯上』『伏拝』、同じく『熊野集』（千九百八十四年）に『不死』『月と不死』がある。『月と不死』も鏡花『高野聖』に範をとって、異界の入り口の茶店と異界への先導者である行商人という設定を借りている。

泉鏡花『高野聖』は飛騨が舞台に設定されている。ヒルの大群に悩まされながら行く聖は深山の中に一軒の宿を請う。聖はその女主人の妖艶さに魅かれていくが、女主人に魅せられた者は残らず畜生に身を変えさせられることを知り、命からがら脱け出る話である。この高野聖は、「後で聞くと宗門名譽の説教師で六明寺の大和尚であったそうな」とされる厳格な修行僧というふうを描かれている。ところが、中上健次の被慈利は、まるで反対にデスペラートな心情と欲望だけで動く俗物のように描かれている。

飲み食いを断った事は何度もあったし、他人並みに学問をはじめ師と仰ぐ人に経を覚えるのがはやいと眼を掛けられた事もあったが、もともと坂の者か谷の者かそれとも猿飼いが猿の代わりに捨てた子が経を覚えただけの事だったのか、いつも有難い経の文句よりジャアラジャアラジャアラという喉が鳴るような音のような淫蕩な方に行ってしまった。(中上健次『熊野集』より『不死』)

「坂の者か谷の者かそれとも猿飼いが猿の代わりに捨てた子」とあって、この被慈利が捨て子ということだけでなく、「道々の者」「坂の者」といえば中世、清水坂や奈良坂に集まっていた卑賤視された人々をさすように、被慈利そのものの身分的な性格を示唆している。『高野聖』の大和尚に対して、被慈利をまるで逆の、経さえ読もうとしない、「盗つ人や乞食同然の」アウトローに仕立て上げている。その被

慈利は、熊野山中の滝であつた女を欲望のままに犯す。女は敵を逃れて山中をさまよう「貴い御方」の女御。そして「しようにん様あ、たいし様あ、救ってくださいませい、」とせがむ女を被慈利は情事の最中に絞め殺す。それが最高の悦楽であるかのように。

中上健次の『不死』は、深山、山蛭、山中の女人、滝と『高野聖』と設定は同じながら、まるでその構図に対する陰画のように描かれている。『高野聖』はいうまでもなく泉鏡花の代表的な名作であるが、『不死』は鏡花作品を敬愛した中上健次ならではの、鏡花へのオマージュにちがいない。

ところで『高野聖』といえば、五来重氏の著書に仏教民俗学で同名の作品がある。これも五来氏を代表する名著である。中世以降、高山を中心に庵を結んで修行を重ね、全国に回国と勧進、布教活動を行った下級の僧たちの集団が存在した。高野山頂の寺院において真言經典の講読、修行に明け暮れた学侶、行人方とちがって、半僧半俗の道心者で修行と同時に大寺院の勧進活動や施行を担い、今日の高野山の宿坊の元をつくった集団でもあった。説経節の『苺萱』や『平家物語』の『滝口入道と横笛』など多くの唱導文芸を産み出したのも彼らである。しかし、五来重氏の『高野聖』の『はしがき』には、泉鏡花の道心堅固なそれではなく、「実際の高野聖は近世には非事吏などと書いていやしめられるものであつたし、(略)明治時代まで「高野聖に宿かすな、娘とられて恥かくな」という口口があつたというから、とても道心堅固などといえる代物ではなかつたのである。」(五来重『高野

『聖』と、鏡花の『高野聖』によってつくられたイメージを真つ向から否定する。これでは中上健次の被慈利の方が鏡花のよりも高野聖の実態に近いのではないかとも思えてくる。それでも、五来氏は『高野聖』の中で、「聖というものは、仏教が庶民化するために、必然的に発生した宗教者の形態であった。それは仏教の姿をとりながら、仏教よりも庶民に奉仕する宗教活動を行った」「聖と庶民を結ぶ共通項は庶民信仰である。それは原始宗教さながらの呪術性と鎮魂性をもっていて、教理や哲学の媒介なしに、庶民の願望である現世の幸福と来世の安楽をかなえようとする。」と、庶民生活とその信仰にとつての聖の存在意義を説く。ときには橋を架けたり、井戸を掘ったりという社会的作善にはじまり、薬草の知識と真言をもつての施療や茶、湯の施行を行い、仏の功徳をまねくために勧進をつのる。人々の実質的な生活に役立つ奉仕活動と鎮魂の祈りを自らの行としたのが高野聖であった。

一方、中上健次の、「里に下りては修行を積んだものだといつては、子供のかん虫封じも厄払いもうらないもして廻り、一握りほどしかない米を盗った事もあった」という被慈利は、五来重『高野聖』と同じく修行をし、庶民の求めに応じて修行を行うことでは変わりはない。ただ、「山中に入り、身を獣に施し骸骨となつてもよいと思つてきた被慈利に生命へのどんな執着もなかったが、学問のある僧のように経を読むのがいやだった」り、盗みをしたりと、墮落したならず者ふうに描かれている。それでも、庶民とのかかわりからすると五来重『高

野聖』の延長線上にあると見てさしつかえないヒジリである。また、法華経と念仏を誦すあたりも、中世以降の高野聖の大半が念仏聖であったとする点でも共通する。

ところで五来氏は『高野聖』で西行法師も高野聖、念仏聖であつたとの説を展開している。北面の武士佐藤義清が二十三歳で出家し、修行と回国勧進に身を投じたことはあまりにも有名である。待賢門院への失恋ゆえに、あるいは世をはかなんでと、様々に脚色されているが、高野聖という実態から西行を捉えたのは画期的であつた。五来氏は、「(東大寺の) 再建のために俊乗房重源³が大勧進聖人に任命されたのも、かれの名声を利用した大口募財であつたことは、『吾妻鏡』をみればあきらかである。」と西行の勧進聖としての功績を追う。そうやって、道心堅固な清僧としてではなく勧進聖の面からその足跡を追つていった。そしてこの五来氏の高野聖としての西行像をもとに書かれたのが吉本隆明『西行』である。吉本氏は、出家は十二世紀に世間を風靡した前衛的な思想だとして、そこに飛び込んだ西行を「時代思想として、出家遁世を実践しようとする姿勢が、鳥羽院の親衛であつた西行をとらえる契機は、それほど不自然でなくあつたとかんがえてよかつた。」と推察する。さらに、「時代思想は、ひとびとの漠然とし

³ 重源(一一二六～一二〇六)平安末期、鎌倉初期の僧。紀氏の出、五度渡宋し、東大寺再建を始め各地の大寺院の再建、修復に勧進を組織して貢献した。著作に『南無阿弥陀仏作善集』がある。

た不安に、浄土欣求への志向性をおしえた」と、念仏聖に身を投じた西行として『山家集』を読み解いていった。その吉本隆明氏であるが、中上健次にとっては、師と仰ぐ人物であったことはまちがいない。とすれば、中上健次が吉本隆明『西行』から五来重『高野聖』に出会ったことは、容易に想像できる。

三 庶民の中の浄土教へ

中上健次の『千年の愉楽』『奇蹟』という路地の若衆の生涯を扱った小説作品の底流には原始な浄土教が流れている。路地という舞台をどこにもなかった共同体としてしつらえるために、はるか彼方から眺める視線が導入されている。釈迦如来でも阿弥陀如来の視線でもいい、路地の衆生のあいだに生起する哀憐、愛憎、喧噪、刃傷の沙汰、あらゆるものを包み込む柔らかな視線である。そしてそれを地上において具現化した者が、路地の衆すべての祥月命日を諳んじ、子の生誕にかかわる産婆のオリユウノオバである。伴侶の礼如さんは僧侶で、夫婦で住民の生と死を見続けてきた。その意味でオリユウノオバは、路地という土俗性の化身でもあって、中上健次がつくりあげた、もつとも魅力的な登場人物である。

そのタイチの子が産まれる日、オリユウノオバは眠って見た夢があまりに楽しく美しく、そのまま二度寝すれば夢を忘れてしまうと、

起き出す時間でもないのに起き出し、仏壇に火をともし、祈り、家の掃除をやり、土間を掃いた。それでも日がのぼらないので、竈に火を熾して産湯を沸かし、開けた戸口から夏の朝が明ける気配に気づき、外に出た。

子どもが産まれる日の朝、産婆のオリユウノオバがとつた行動を簡潔に記してある。これは、産湯はともかくとしてオリユウノオバだけでなくどこの家々にもあった、朝の儀式と支度の風景である。朝一番に仏様とご先祖様に手を合わせているように、庶民の信心の在りか生活そのものにあつた。そして、朝がきて、

夢の中で白み、次に黄金と朱に変わった雲の間から、裏山を抱かえるように仏様が姿を現したのはほどなくだった。

仏様は裏山の中腹の葎（ムグラ）の宿のようなオリユウノオバの家をのぞき込み、朝日に浮かび上がった裏山を見上げるオリユウノオバとタイチを見て微笑みかけ、振り返って無言で小さな光る雲を見ると言うように見る。目を凝らしていると齢老いたオリユウノオバより目の効く若衆のタイチが、「ムカデクイツク、クイツク⁴かよ？」と前に声を出す。

「そうじゃだ」とオリユウノオバが答えた。それを聞いてオリユ

⁴ 亡くなった僧侶の礼如さんの中からかかって言う言葉。お経を読んでいて着物の中に入ったムカデを気味悪がり、「ムカデクイツク」と経文の中で言ったという。

ウノオバまで礼如さんはないがしろにすると仏様が眉をしかめた気がしてオリユウノオバはばつ悪げにタイチをつねる。「んなな、タイチ、その言い種」オリユウノオバは取り繕うように言ってから光る雲の上の礼如さんを仰ぎ見、「礼如さん、タイチの赤子、今日、産まれるじえ」と声を掛けた。

「そうやア、ここにある」礼如さんが答えた。

仏様が両手を合わせ、小さな雲の礼如さんよりもっと小さな雲に両手を差ししのべ揃い、オリユウノオバに抱けと差し出す。呆気にとられたまま落とさないようにそれを抱き上げた時、オリユウノオバは目を覚ましたのだった。(中上健次『奇蹟』)

『奇蹟』は、路地で「澱んだ血」をひく中本の一統のヤクザ、タイチの物語である。若いうちからひとの目をつぶすような悪行を行い、我がもの顔に路地を仕切るタイチであるが、流れ出した血がとまらない宿命を負っている。

それにしてもいい情景である。「裏山を抱かえるように仏様が姿を現」すとは『山越阿弥陀図』で、赤子を抱くところからは狩野芳崖『悲母観音』を想像してしまう。タイチの悪行も宿命も「赤子」の生誕の前には、意味をなさない。人間であるがゆえに生じる喜びも葛藤も彼方(仏様)からの視線で見られている、と同時に視線の主は、そのすぐ間近で情感を共有していく。この彼方からの視線によつて、路地の者たちの非道も悪業も昇華され、人間のありふれた業とし

て許容されてしまう。そしてもうひとつ、これは夢の中、夢告(むごう)である。たとえば、今昔物語の本朝部卷第十一「弘法大師、宋に渡りて」では、弘法大師の出生を「初め、母阿刀の氏、夢に聖人來たりて胎の中に入る、と見て懐妊して生ぜり」とある。これは子どもは神仏の授けもの、それも夢の予告をとまなうというのが、ごく自然な在り方の例である。今でもそれは通用する。誰その生まれ変わりがあつたり、不吉な正夢であつたりと、私たちはなにげなく夢の効能にうなずいている。科学の進歩とは無関係な、庶民信仰の根源にかかわるものだろう。仏様が赤子を授ける情景に私たちが微笑むのも、庶民信仰が生きている証拠ではないだろうか。中上健次が示す、彼方からの視線も、仏様の授けもの、すなわち慈悲も救済も、庶民信仰であつて、同時に原始的な浄土教のように思えてならない。法然、親鸞の説く悪人正機説にまでまだいたらない、庶民のささやかな願望としての浄土教である。それが、卑賤視の路地を極楽浄土にしたてている。

《参考文献》

- 龍肅訳注『吾妻鏡』 岩波文庫 一九三九年
五来重『高野聖』 角川選書 一九七五年
五来重『熊野詣』 講談社学術文庫 二〇〇四年
五来重『山の宗教』 角川文庫 二〇〇八年
吉本隆明『西行』 講談社文芸文庫 一九九〇年
高澤秀次『評伝 中上健次』 集英社 一九九八年

中上健次の庶民信仰

中上健次『中上健次選集一〜九』 小学館 一九九九年

池上洵一編『今昔物語 本朝部』 岩波文庫 二〇〇一年

中村元『浄土経典』 東京書籍 二〇〇三年

(研究紀要編集部は、編集発行規程第五条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。二〇〇一年一月一五日付)